

# HANEDA SKY CAMPUSを基点とした 「新しい働き方」のかたち

斎藤 慎一  
(株式会社梓設計)



今号から皆さんの働く設計事務所をご紹介いただくコーナー「事務所訪問」を始めます。新型コロナウイルス感染症によって、世界中で新しい働き方が加速し、以前の設計事務所の働き方とは格段に変化を遂げています。ここでは組織事務所からアトリエ事務所まで、その規模を問わず、皆さんの働き方、デザイン、コミュニケーション、遊び方まで、さまざまな活動の様子を紹介していただきます。お互いに参考にしていただき、これからの設計事務所の働き方を考えていきたいと思えます。(『JIA MAGAZINE』編集長 坂牛 卓)

## オフィスコンセプト

### ●巨大物流倉庫を活用し、本社機能を集約

梓設計の本社オフィス(HANEDA SKY CAMPUS、以下HSC)は、羽田空港に面した、面積5,300㎡、階高6.6mの巨大な物流倉庫の空間で、450名の社員全員がフリーアドレスで働くオフィスです。

HSCへの移転は2019年8月に行われました。以前の本社は天王洲アイルにあり、分室が羽田にありました。長年、本社機能が分散した状況で、天王洲アイルのオフィスも4フロアに分かれていたことから、本社機能の集約が会社の課題でもありました。その課題を解決し、生まれたのがHSCであり、5,300㎡の物流倉庫のワンプレートを活用したオフィスは100m先まで見通しのきく、今までにないオフィスのかたちとなっています。

内部は間仕切りを最小限とし、社長室も役員室も設置しない、巨大なワンルーム空間です。ワークスペースやラウンジ、カフェテリア、ホールなど、さまざまなゾーンが一体的なワンルームの中で並置され、有機的なつながりの中で成立する構成としています。例えば、ワークスペースからホールでのレクチャーの様子が垣間見えたり、仕事に疲れたらカフェテリアでふらっと息抜きできたりと、オフィスを単に仕事の作業場と捉えるのではなく、日常の延長のような独特の「ラフさ」を持った場とすることを狙っています。

### ●パブリックスペースとしてのランウェイ

さらに、ゾーニングを横断するように4本の「ランウェイ」が貫通していて、一番長いランウェイで長さ100mあります。それらが縦横斜めに交錯するように配置され全体の骨格を作っています。滑走路を模したランウェイとは「空港の梓」という社のアイデンティティーを体現する場であると同時に、オフィスの中に挿入されたパブリックスペースで、多様なアクティビティを受け入れる場として存在しています。ミーティングや食後の休憩の場、全社イベントの際は料理が並ぶパーティー会場にもなります。倉庫のスケール感を最大限生かして生まれたこの公共性が、一般的なオフィスでは体感できない風通しのよさを実現しています。さらにそれらの倉庫スケールの空間に対して、30種類にも及ぶ造作家具がオフィス内に散りばめられることで、ミーティングやプレスト、集中作業などさまざまなアクティビティをヒューマンスケールで生み出す要素となっています。

### ●定着したフリーアドレス

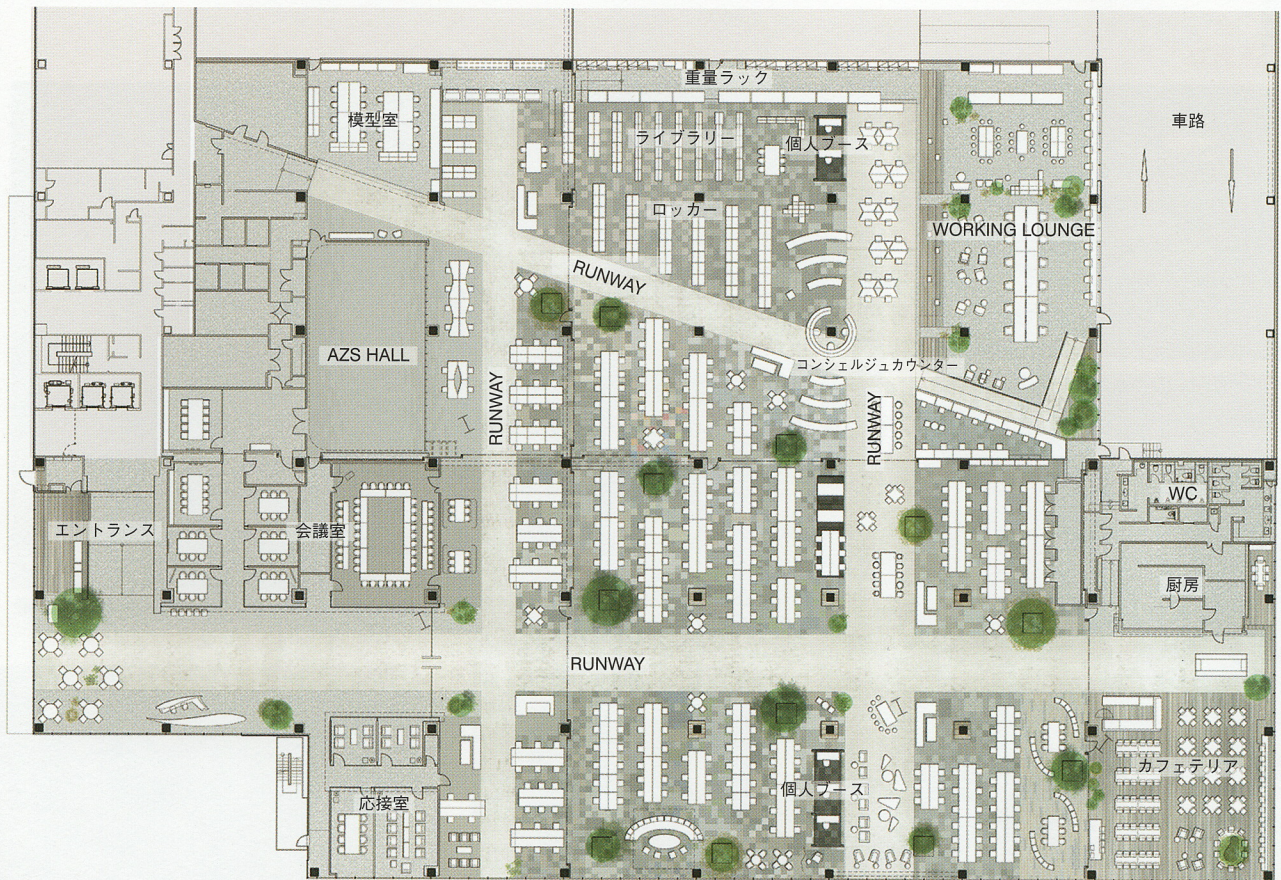
もう1つの特徴がフリーアドレスです。梓設計では同業他社に先立って2017年にフリーアドレスを導入しました。これは

本社移転前からの試みであり、試験的に一部の部署で始めましたが、徐々にIT環境(全社員にノートPC、iPad、iPhoneの配布)や紙資料のデジタル化の取り組みを進めながらアップデートしていき、移転を機に社長も含む全社員がフリーアドレスとなりました。HSCでは誘導型フリーアドレスと名付け、点在させた部署ごとの収納棚にその部署の社員が「誘導」され、集まることを狙った、ゆるいグループアドレスのような形をとっています。今ではこの働き方が自然と身に付き、社員の自律性の向上にもつながっています。また、この働き方が浸透していたことで、結果的に新型コロナウイルスに伴う、在宅勤務への移行もスムーズに行うことができました。コロナ禍前は限定的(育児、介護など特別な理由がある社員のみ)だった在宅勤務も今では当たり前となり、HSCの在席率は平均30%ほどとなっています。フリーアドレス+在宅勤務を採用することで働き方は大きく変わり、社員の裁量は向上し、自由な働き方が促進されています。プロジェクトメンバー間でコミュニケーションをしっかりとることを前提とし、HSCや、自宅、都内に構えたサテライトオフィスなど複数の拠点を状況に応じて使い分けて日々働いています。

### ●オフィスという場の意味を問い直す

一方で、ここで議論になるのが「オフィスという場の意味」です。1拠点に本社機能を集約することが目的だったHSC移転が、コロナ禍を機に、結果的にまた分散した働き方を許容することになりました。世界中の誰もが予期できなかった非常事態なので致し方ないとはいえ、自宅でもどこでも仕事ができるようになった今、オフィスという場の意味は何なのか、改めて議論が必要ではないでしょうか。梓設計ではHSC移転3年を経過したことから、オフィスのアップデートを検討しています。これには会社の幹部クラスから若手までさまざまな立場の社員で議論をし、検討を進めている最中です。意見を聞くと、分散して働いていてもやはりオフィスは必要で、入社した際は作業だけでなく、いかに周囲とコミュニケーションをとるかということを多くの社員が意識していました。今後は自由な働き方を尊重しつつも、プロジェクト単位でのコミュニケーションを促進させるようなハード・ソフトの変革を計画中です。





事務所プラン ゾーニングを横断するように貫通する4本のランウェイが全体の骨格をつくっている

## デザインポリシー

### ● 梓設計におけるデザイン開発メント

明確に決められたデザイン開発メントの手法はなく、担当者、案件の内容によってさまざまですが、基本的にはベテラン、若手問わず、フラットな議論をベースに設計は進んでいきます。そして基本設計の途中で第三者的な目線で幹部がデザインを確認し、意見交換をする会議があります。また、ドメインと呼ばれる用途ごとの専門性をもった部署が6つ存在し、必要に応じてドメイン内でも設計の経過を報告して、意見交換することもあります。基本的な進め方としては、担当者が組み上げていった設計に対して、組織のノウハウに基づいた肉付けや方向修正を行ってバックアップしていくという流れが多くなります。

近年はデジタルデザインにも力を入れており、設計者単体でデザイン検討を完結されるのではなく、専門部署と協働しながら検討を進めることでデザインの新たな可能性を引き出すことにも努めています。



ランウェイ上の打ち合わせスペースではさまざまなミーティングが行われている



個人ブースの背面がホワイトボードの壁面となっていて、プレストスペースとして活用している



ブース席は打ち合わせや作業などで活用される、人気のエリアとなっている



## 働き方

### ●週1日以上の出社が条件 自転車通勤も可

在宅勤務も可としており、最低週1日は本社に出社することを条件に、社員は其中で自由に働いています。コミュニケーションについては、部署内で少人数のグループを組み、朝会をWebで開催するなどし、定期的にコミュニケーションを取る取り組みをしています。本社へは自転車通勤も可としていることから、近隣に住む社員などは自転車で通勤しています。仕事は基本的にプロジェクトチーム単位で活動し、必要に応じて対面とWeb会議を使い分けて進められています。コロナ禍を経て仕事の仕方は大きく変わりましたが、今ではこの方法が違和感なく浸透していると思います。



ワーキングラウンジには全長11mのロングデスクとラウンジチェアが置かれ、ゆったりと仕事ができる



カフェテリアも仕事をするスペースとして活用されている



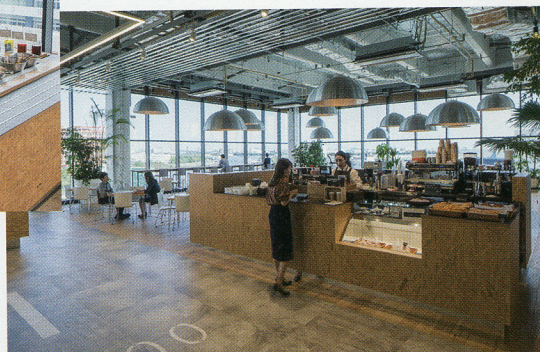
階高6.6mの開放的な空間で仕事をしている



カフェテリアでは昼食を提供。コミュニケーションの場としても活用されている



人気のサラダバー



カフェカウンターは朝～夕まで営業し、淹れたてのコーヒーや厨房で焼き上げたパンなどを購入できる

## リラックスタイム

### ●息抜きのできる要素を各所に散りばめる

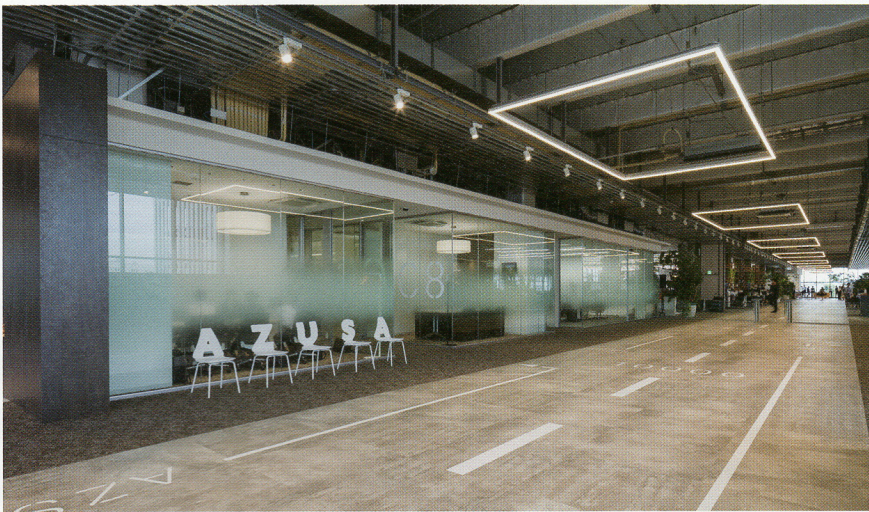
HSCでは外部委託したカフェテリアで昼食の提供と、終日営業のカフェスタンドで軽食や飲み物の提供を行っています。日替わりの複数のメニューや、サラダバーもあり、出社した社員はほぼ活用しており、好評です。最近はコロナで中止していたカフェテリアでの夜の懇親会も再開し、飲食を介したコミュニケーションの場にもなっています。

他にも仮眠室や卓球台にもなるミーティングテーブルなど、仕事の息抜きができる要素をオフィスの中に散りばめています。総務部の窓口である円形のコンシェルジュカウンターの回りにはお菓子やコーヒーバーが設置されており、さまざまな人が自然と集まる、コミュニケーションスペースとなっています。



ワークスペースには植物が多く置かれ、緑視率を高めることでリラックスできる環境づくりに配慮している





全長100mのランウェイがエントランスからカフェテリアまで伸びる



社内にはさまざまな種類の椅子が置かれていて、お気に入りの椅子を選んで仕事ができる



トラックバースの段差を活用したワーキングラウンジ



大田区の町工場で作成した円形のペンダント照明が浮かぶカフェテリア



式典や展示会、レクチャーなど多目的に使用されるAZSホール



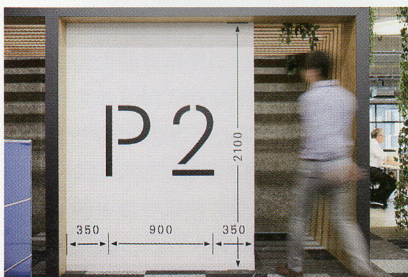
社内窓口として機能する円形のコンシェルジュカウンター



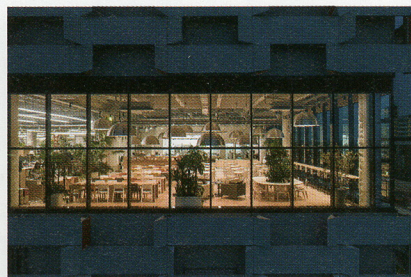
車路がオフィスに隣接し、模型などの物品の運搬が容易にできる



模型室はランウェイに面したオープンな設えで作業風景を切り取る



個人ブースが5室あり、集中作業の際に活用されている



高さ5mのカーテンウォールからオフィスの様子が浮かび上がる

■ オフィスデータ

株式会社 梓設計

所在地

〒144-0042

東京都大田区羽田旭町10-11

MFIP羽田3F

<https://www.azusasekkei.co.jp/>

事務所創設年 1946年

(本社オフィス移転 2019年)

従業員数 685名

オフィス面積 5,300m<sup>2</sup>

所属社員数あたり：11.8m<sup>2</sup>/人

席数あたり：16.4m<sup>2</sup>/人

フロア数 1

平均年齢 44.3歳

出社率 約30%

(2022年9月現在)



本社外観

斎藤 慎一(さいとう しんいち)

2014年 早稲田大学創造理工学専攻建築学専攻修了

同年 梓設計入社

現在、特定プロジェクト推進室 CX室 アソシエイト

梓設計本社「HANEDA SKY CAMPUS」設計担当